

## ○水戸内原イオン

水戸市の郊外常磐線内原駅から歩いて10分位の大平野の中にイオン(敷地凡そ4万坪、商業施設2万坪)は光り輝いて見えました。

駐車場4千台、年間販売額280億(予想)、商圏は車で30分、14万世帯41万人、従業員2800名、専門店数180店という規模でした。(推定ですが木更津築地へ予定される規模は敷地面積で凡そ3倍、商業施設で凡そ2倍と思われるので、まさに前例のない巨大な商業施設に木更津はなると思われます。)内部はアリオ蘇我と同じ様にスペースは広くゆったり、一店当たり売り場面積も私が想像した倍以上でした。

出店者は新宿、銀座、横浜等都心の有名店ばかりでした。水戸から来たと言うお客様に聞いてみたら、「水戸はすっかり静かな街になりました」と答えが返ってきました。

## ○湯布院温泉(大分)

10数年前に来た時は国東半島の摩崖佛、富貴寺、臼杵の大佛が目的で湯布院に着いたのは夜でした。由布岳を眺めながら入った露天風呂。静かな緑豊かな山奥の温泉場と言う記憶だけでした。湯布院町は人口1、2万人の田舎町温泉で年々さびれた町となりつつありました。この田舎温泉町の街おこしは山奥、田舎町の魅力を大切にすて都会との文化の落差を大切に活かそう、金より人間関係を大切にしようという運動でした。そのためには大型商業施設、大型ホテルは絶対入れないで田舎町であることを大切にしよう、田舎の風物、人柄を育てる努力をして実際に大企業の進出を阻止して今日の田舎温泉を育てられたのでした。

日帰観光360万人、宿泊客100万、観光収入凡そ200億、土産物35億、農産物13億とすばらしい街を作り上げました。田舎のよさを大切に都会のマネをしない街づくりでした。

## ○黒川温泉(熊本)

阿蘇山の北側南小国町に黒川温泉はあった。折から残雪の山あいには雨が降り始めて折角の九重高原、阿蘇山系の雄大な大草原は霧雨の中包まれて見えませんでした。黒川温泉は樹木が茂る山の中にありました。

ここの温泉の特長は、宿は泊まるだけ、頼まれれば軽い食事程度、風呂は入湯料を払って「温泉のはしご」ができる。私達が足を止めた「旅館にしむら」は小さな黒光りする湯治宿の風情でした。この黒川温泉になぜ多くの客が訪れるのでしょうか?答えは、私が近年幾度も訪れている遠いけれど好きな温泉に城崎温泉(兵庫)があります。この温泉は日本海に面してかつて日本海航路を往来した「北前船」の寄港地で、今も石積みの運河、石の橋が横たわり両岸はしだれ柳が続いています。

この町が栄えているのは昔ながらの風物史と「商いの仕組み」です。宿は泊まるだけでいい、夕食は街へ出ておいしいものを食べて下さい。日本海の魚で酒は居酒屋で飲んでください。おみやげは街を歩いて選んでください、と町がすべて分業だから町がにぎわっているのです。城崎が海辺なら黒川温泉は山の共存共栄を成功させ訪れる人々の安らぎ、癒し、ゆとりを与えて古くからの街を大切に育ててきた温泉町でした。

街おこし、地域活性化に取り組むにあたって、役所や大手企業に分かってもらいたいことは、「大企業・大型店が行き過ぎた寡占化をしないように是正するならば、商店街もまた排他的にならず包容力を持った相互信頼、平和共存が出来る街づくりができるはずだ」と、いうことを改めて今度の視察で教えられました。

湯布院町は合併して由布院市となりました。